

座談会

「医療崩壊」



日時：平成21年4月18日(土) 午後2時

於：(社) 豊中市医師会

出席者	市立豊中病院	副院長 (内科)	片桐修一
	市立豊中病院	小児科部長	松岡太郎
	市立豊中病院	産婦人科部長	徳平 厚
	市立豊中病院	救急科部長	東 孝次
	水野産婦人科医院	院長 (産婦人科)	水野俊樹
	藏春堂 小西病院	院長 (外科)	小西則久
	豊中市医師会	会長 (整形外科)	児島義介
	雑誌編集委員会	主担当理事 (産婦人科)	田中 實

特別寄稿：ちさきこどもクリニック院長 (小児科)

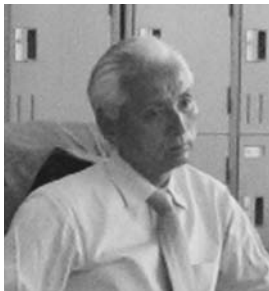
地寄剛史

(敬称略)

○司会（田中） ただいまより、豊中市医師会雑誌48号のための特集記事「医療崩壊」について座談会を開かせていただきます。先生方にはお忙しい中をご出席いただきまして、本当にありがとうございます。

最初に児島会長からごあいさつをいただきたいと思えます。

○会長 皆さん、土曜日のお忙しい中、ありがとうございます。



児島会長

今年度の医師会雑誌の特集といたしまして、医療崩壊をテーマに取り上げることになりまして、原稿募集及び座談会を開かせていただきました。今までいろんなテーマで雑誌がつくられてき

たんですが、医療崩壊というような非常に重い、内容の込んだテーマは初めてでございます、皆さん方が医療崩壊についてどう考え、どうしたらいいかということをお話いただきまして、豊中市医師会の会員にアピールし、それを通してほかのところへアピールできたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○司会 どうもありがとうございます。



田中主担当理事

実は雑誌編集委員会で、今年度第48号の“特集”のテーマを決めるにあたって、市立豊中病院副院長の清原先生から、『医療崩壊』をご提案いただきました。「医療崩壊の一つは即ち病院崩壊」だということで、市立豊中病院の先生方に原稿をお願いすることになりました。一方、昨年雑誌47号の“特集”「一人

一言」に、本日ご出席いただいております東先生の「救急診療科でも医師のみならず看護師のマンパワー不足があり、季節によっては常に満床に近い状態が続きます。医師会を初め皆様の期待に十分こたえられず、スタッフの努力の割に地域医療への貢献が十分評価されていないのではないかと心配しています」という一節がありました。勤務医の先生方は、いろいろな思いで日常診療に携わっていただいているんだなということで、先生方に原稿をいただくとともに、私たち医師会員にお伝えになりたいこともいろいろおありなのではないだろうかということで、きょうの座談会の運びとなった次第です。

立案者であり、病診連携を担当しておられる清原先生が、きょうは残念ながら学会のためにご欠席になりましたけれども本日の座談会では「医療崩壊」を防ぐために、市立豊中病院と医師会がどのように病診連携をすすめるべきなのかをひとつのテーマとして進めさせていただきたいと思えます。

それでは、医療崩壊という言葉がまだ使われていない早い時期から、危機が顕在化した小児科を最初に取り上げさせていただきたいと思えます。松岡先生よろしくお願ひいたします。

○松岡 市立豊中病院小児科の松岡です。よろしくお願ひいたします。



松岡先生

原稿を書かせていただくときに、豊中市の問題を書けばいいのか、日本全国津々浦々の話を書けばいいのか、非常に悩んだのですが、ご趣旨を誤解しているかもしれませんが、

一応豊中の事情ということで書かせていただきました。全国津々浦々のレベルから申しますと、豊中市は非常に恵まれていて、ありがたい限りだと

私は感じております。

私の原稿の順番に少し追加をさせていただきますと、1番として、病院勤務の小児科医の本音ということを書かせていただきました。ある程度の専門分野——サブスペシャリティーを持って病院で働きたいという医者がいたときに、その専門性をかなり守ってあげるようなシステムが重要ではないかと思っています。

ある程度年齢のいった先生の話だけではなく、若い先生方も思いは同じといえますか、1次診療に手を煩わされないで、しっかり勉強したいということがおありのようですので、年がいつている若いにかかわらず、そういった病院勤務医のアイデンティティーを守るシステムは非常に重要と改めて認識いたしました。

2番目に、豊能広域子ども急病センター（資料1参照）のことを書きました。これは、平成16年にオープンした、全国的にも非常に貴重な大変ありがたいセンターとして、医師会の先生方にもお礼申し上げる次第です。ただ全国的なレベルで申しますと、豊能地域は恵まれ過ぎている。つまり、大阪大学病院と循環器病センターがあって、若い、本給が少なくバイトをする必要のある先生方が全国から集まると。ですから、これを全国レベルの日本小児救急医学会とかで発表しても、豊能はいいですね終わってしまうわけです。ですから、ありがたいのはありがたいんですけども、これを一般化するにはどうしたらいいかということをお我々としては全国にアピールする必要があると考えています。

労働力というのが一番問題になってくると思いますが、地壽先生の原稿の2ページ目（40頁参照）、追加1の真ん中あたりに、「医師会の会員の中でも出務されない先生方も多く、豊中市医師会所属の出務医師はわずか7～8名ほどです」と書かれています。逆に言うと、医師会から7、8名の先生のご出務でもセンターが運営できているということで、そういう実情をみんなが

認識していく必要があるかなと。ですから、これを全国レベルに広げていくには、医師会の先生方のご協力が欠かせないと思っております。ただ、システムとしては豊中病院も大変ありがたく思っております。

3番目に、病診連携について書かせていただきました。医師会の先生方のご協力で、病院もかなり助かっております。一般の午前中の外来に受診する患者さんの数が、5年前に比べますと3分の1から2分の1に減少しています。いわゆる一見さんは、病院に行くよりまず開業医の先生にみてもらうんだという風潮が広まってきて、私たちもかなり楽をさせていただいております。加えて、勉強会も、私が部長にさせていただいた4年前に幾つか立ち上げて、開業の先生方と膝をつき合わせて話をする会を設けましたところ、多数ご出席いただきまして、そちらもよく機能していると思っております。ただ、後で申し上げますけれども、医療の標準化がやはり課題として残るかなと思っております。

4番目、院内での試みということで、

①として、出産、子育てのため一たん職を離れた女性の小児科医をどう採用してどう働いていただくかというシステムの確立です。これは小児科に限らずどの科でもそうだと思うんですが、女性医師の方は復帰に向けての研修をまずお望みだと思しますので、その辺をうまく企画できたらと思っております。

②として、いずれは入院患者さんにとって主治医というものがなくなるといけないんじゃないかとまで私は思っています。少なくとも急性疾患、つまり四、五日で退院するような感染症の方に関しては、主治医というものがなくて、そのときどきの病棟担当医が対応してお話をするというシステムに変えていく必要があると思います。もちろん、ネフローゼとか白血病とかで長期入院している人はこれでは回らないと思うので、慢性疾患と急性疾患を分ける必要があると思いますけれども、急

性疾患に関しては、主治医というものを廃止して、当直明けなどでも帰りやすい体制をつくる必要があると思います。

ただ、一般の方はそうは思っていないので、当直明けでも何でも、うちの主治医はおるか、おるかとおっしゃいます。その辺の一般の方々への啓蒙といいますか、教育といいますか、そういうことも必要かと思えます。

最後に5番、今後の課題ということで書かせていただきました。私が一番申し上げたいのは、②、地域の小児科医療の標準化ということです。1人の患者さんが2カ所も3カ所も医療機関を受診して、そこでいろんなことを言われて、何が正しいのかわからなくなって病院に来られるということが非常に多いと思います。同じ状態の子供さんをみたときに、できるだけ同じような説明、同じような治療方針が提供できるようなことを考えてやっていかない限り、患者さんの二重、三重にもわたる受診行為はなくなるならないと思っておりますので、その辺を考えながら今後やっていく必要があると思っています。

ただ、地寄先生の文章を拝見しますと、2枚目の2つ目の段落(40頁参照)、「小児科医療の標準化には少し難しい問題があると思います。」とあって、そもそも開業した理由の1つが「自分の思いどおりの医療を行うこと」を挙げられますと書いておられまして、ちょっとショックなんですけれども、もちろん多少の誤差といいますか、先生方の説明の仕方のニュアンスの違いとか、そういう遊びの部分はあってもいいし、むしろあるべきだと思いますけれども、本質的なところはやはり統一していく必要があるのではないかと思います。

あとは、地域との連携をどの範囲まで広げるか、つまり市立豊中病院は豊中市医師会の先生方と連携するだけでいいのかという問題ですが、少なくとも小児科におきましては、豊能広域子ども急病センターが機能していて、例えば吹田市、池田市、箕面市の子供さんたちも、夜間に数多

く豊中病院に入院するわけですから、豊中市の枠を越えて豊能2次医療圏ぐらいの範囲でそういうことを考えていく必要があるかなと。場合によっては、川西とか伊丹まで広げた範囲で、病診連携とか医療の標準化を考えていく必要があるかと思っています。

私からの追加は以上です。

○司会 先生には、きょうは、学会がおありだったのを、奈良から急遽この座談会のために戻ってきていただきまして、本当にありがとうございます。今、追加発言をしていただきました。実は、豊能広域子ども急病センターを立ち上げるのにご尽力いただき、現在も出務医師として出ておられる地寄先生がこの座談会に入っていただけのが一番適切だと思っていたのですが、地寄先生は学会にご出席でご意見を賜りませんので、地寄先生に松岡先生の本誌別稿(12頁参照)を読んでいただいて、感想を書いていただいたのが、今先生方のお手元にあるものです。地寄先生のご意見としてお読みいただきまして、雑誌には、このままの形で掲載をご了解いただけたらと思います。

それも含めまして、他科の先生から、いま松岡先生の言われました豊能地区における小児科医療について、ご質問とかがありましたらお願いいたします。